

東日本大震災・原子力災害伝承館の運営に関する有識者懇談会
調査・研究専門部会 議事録

日 時 令和5年3月18日（土） 11：20～12：00

場 所 東日本大震災・原子力災害伝承館 研修室

出席者 別紙委員名簿のとおり

内 容

1 館長挨拶

2 委員自己紹介

3 議題

(1) 調査・研究活動実績及び今後の取組みについて

(別紙資料5に基づき事務局より説明)

(2) 意見交換

【小沢委員】

今後、研究内容の体系化を進め、複合災害からの学びを体系的に社会に展開していくことが必要であり、それが伝承館の役割だと感じている。

研究員を育てていく上で、上級研究員の位置づけは大変重要であり、アドバイザーのような形で関わっているということは、常任研究員にとって非常に好ましい状況であると考えられる。その後、研究者が育ってくると、自分でやりたいことが出てくるので、アドバイスする上級研究員と常任研究員の位置づけは少し変わってくるものと推測されるが、それもまた望ましい姿である。

研究者の業績が整ってくると、その発信を求められるが、伝承館としての発信活動とそれ以外の研究者としての発信活動を分けておく必要がある。アウトリーチ活動は研究者として必要だが、伝承館の活動に雁字搦めにされてしまうと研究活動にも影響を及ぼしかねない。研究者の個別の研究活動にかける時間を10%から20%与えるということも必要である。

各研究員の研究内容は相互に関係があり、防災伝承の仕掛け作りも踏まえてそれぞれの研究やソサイティがどんなふうに影響をうけていたかということが、まずは調査という部分から入って抽出できていると思う。それが地域の方々や産業と関わりあって、この取り組みがさらに進展することに期待したい。

【後藤委員】

昨日の東日本大震災・原子力災害第1回学術研究集会では、多岐に渡る素晴らしい研究内容を聞いて、一研究者として非常にインスピレーションがもらえる場になった。さまざまな分野の発表及び意見交換をする場は、ぜひ継続いただきたい。

体制、発信、研究の内容の3点について考えを述べたい。

体制について、ジェンダーバランス等を踏まえた、多様な人たちの登用を考えていただきたい。例えば、メルボルン大学の試みとして、震災の知見を集約する上で、子どものアドバイザリーボードを作っている事例もある。次世代育成という視点で、子ども協議会のようなものを初めはインフォーマルで結構だが、設立を検討してもいいのではないか。

発信に関して、令和5、6年度に国際性を出すとしたら、伝承館で実施する学術研究集会にイングリッシュセッションを設けるのもまず一步ではないかと考える。また、高村館長がいらっしゃる長崎大学で、来年度、国際医療制度の分野における世界最大の学術集会を実施する予定があるので、この機会を活用して発表することも一案である。海外の大学などでも同じようなアーカイブを作っているところ、特にハーバード大学は震災に関する3.11に関するデジタルアーカイブ部門を歴史学者の人が中心になって作っている、そちらとの交流等もぜひ進めてはどうか。ICRPのジャック・ロシヤール教授もフランスの科学博物館で、美術と科学の連携といったような取り組みをされているので、資料収集、見学等の連携から始めてはいかがかと思った。

研究の内容に関する事で、今の小学生、中学生と震災を知らない世代が増えてきているので、親子の対話、大人と子どもとの対話というのが重要になってくる。家族の単位とか地域の大人子ども単位での研究の推進が今後必要になる。

また、デジタル情報及び情報学の専門家が少ない印象なので、それらとの連携が必要と考える。

【藤本委員】

体系、発信、育成の3つに沿って述べる。

体系化について、昨日の学術研究集会及び本日の報告会含め、内容自体も豊富で多岐に渡っていると思うが、分野的には行政、産業の研究が少なかった印象を受けたので、そこに研究を広げていくとバランスが取れるのではないか。

教訓の発信の面では、海外の学会等の後援取り付けや、海外研究者の講演を入れ込むことも、今後の展開として必要だと考えている。また、他事業への展開として、企画展に研究成果のパネルを追加する等、学術的要素を加えることも検討していただけたらと思う。伝承館の立地状況は都市型ではないことも踏まえ、自ら出ていく積極的な企画展の実施やアピール等が必要である。

人材の育成について、現在福島県内に人文系で博士課程の学位を出せる機関がない。

県内の学位を出す機関と伝承館との連携といったものも人材育成に必要な要素の1つになってくるかと思う。

【川崎委員】

いろいろな意見があるが、1点に絞らせていただく。

若手の研究者、常任研究員の方が今後どのように育ち、活躍できるかということが伝承館のエンジンになると思う。阪神・淡路大震災後には、防災など災害や復興に関する専門家や学者が何人も生まれているが、東日本大震災後は、少なくとも私の周りでは福島の都市計画まちづくりに携わっている方はほとんどいない印象である。そのような中で、本日発表をいただいた常任研究員の方々は「福島の宝」であり、高村館長及び上級研究員の方々は自身の研究に加えて、常任研究員の方々のご指導もより一層行っていた、将来的に福島の伝承研究を担っていただける方々が育つ場所に伝承館がなれば良いと思う。

【高村館長】

4名の委員の先生方から貴重なご意見をいただいた。

この場で回答できることについてお答えする。

まず、上級研究員と常任研究員との関わりについては、定期的に会合を実施しており、常任研究員の研究内容の把握、上級研究員からのコメント等をする機会を設けている。また、常任研究員1人に対し、1人の上級研究員または館長がメンターとして付く指導体制が敷かれている

研究者としてアウトリーチも大事だが、自由に研究する時間を持つ必要があることは全くその通りであり、現在、科研費を申請できるような体制づくりを進めている。これによって自分がやりたいことを科研費で応募できる。他の研究者との共同研究体制をつくり、そこをエフォート管理できる体制を整えたい。

ジェンダーバランスについて、工学系の女性の方が、来月常任研究員として着任する予定である。今後も多様性を意識しながら研究体制を構築したい。

子ども協議会については、開沼上級研究員が高校生を対象とした研修を企画、実施した。

そのような場を活用しながら伝承館に対する意見を聞けるような場を設けたい。

海外の交流に関して、先日のF-REI（福島国際研究教育機構）国際シンポジウムの一環で、ICRP、IAEA、OECD、シンガポール大学等の先生方が伝承館視察に来ていただいている。昨年も他の国際機関の先生方に来ていただいて伝承館を見ていただくというような機会を設けている。今後のコロナ禍以降、そのような活動が増えていくのではないかと期待している。

親子での対話についても、非常に重要であり、専門研修の企画の中で検討したい。

情報系分野との連携は、AI 等の活用も含めた新しい技術を駆使した伝承という観点で検討していきたい。

行政分野が少ないことについて、伝承館の研究事業では、行政が震災後どのように復興に関与してきたかというのも一つの大きなテーマとしているので、今後検討していきたい。

長崎での出張展示の際、展示に加え、語り部活動も行った。今後は研究事業の成果をパネルで公開していくということも検討したい。

人材育成について、博士課程との連携は非常に重要なものだと考える。研究事業では各大学の先生方と研究班を形成してり、そのなかに博士課程を担当する先生方もいらっしゃるの、班研究活動を続けながら、博士課程との連携を深めて人材育成につなげていければと考える。

若手常任研究員については「宝」というありがたい言葉をいただいた。我々としても出口戦略は非常に大事だと考えており、そのようなことを念頭に入れながら、F-REI を含む各研究機関、大学及び国際機関等との連携を進めていきたい。

【経済産業省・鈴木室長補佐（オブザーバー）】

先日の F-REI 国際シンポジウムで先生方の活動報告、研究内容を聞かせていただいた。多岐にわたって研究を進めていただいております、そういった機会の造成ができている現状を心強く思っている。

当省は伝承館の研究予算を出しているが、引き続き連携し、伝承館が東日本大震災の教訓の発信、体系化等にご尽力いただけるよう協力できればと考えている。

【復興庁・兼保企画官（オブザーバー）】

本日の発表、興味深く拝聴した。私も F-REI でも、5つの研究課題を進めることとしており、第5分野として原子力災害情報の集積・発信あるいは、まちづくりについての研究というテーマがあり、この辺りというのは他の4分野とはかなり毛色が変わっており、他分野との連携が難しいという印象である。しかし、政府の総合科学技術・イノベーション会議（CSTI）で F-REI の基本計画の審議をいただいた際、ハードなサイエンスだけではなくて、人文社会科学的な研究を F-REI でやっていくことは非常に重要であり、ぜひ力を入れてやっていくべきという提言をいただいております、当該分野は重要性の高い F-REI の研究テーマになっていくものと考えます。

先日の F-REI 国際シンポジウムにおいて、高村先生の先行研究に関する発表があったが、非常に質の高い事業が行われていて、大変感銘を受けたところ。

今後4月からの F-REI の本格稼働の中で新しく研究課題を採択されていくと思うが、第5分野のテーマの中で伝承館の皆さまとの関わりが強くなっていくのではないかと考えている。ぜひ、今後とも F-REI との研究協力をお願いしたい。